HaHaHaHa
歯の話
PART 2

抜歯の歴史

神奈川県歯科医師会「歯の博物館」館長
大野 粛英

入歯師が釘抜き型の鉗子で女性の歯を抜いている。足下には、木製の入歯

芳幾画　本道外画難病療治

人の歯を抜くという行為は、歯科医だけでなく、古代の風習として喪に服す、刑罰の手段として行われていました。

今回は、抜歯の歴史についてです。

古代にも歯を抜く風習があった!?

発掘された縄文時代や弥生時代の頭蓋骨には、上下の犬歯、下の前歯などが抜歯された跡があるものがあります。親知らずや歯のすり減った状態などから十四歳～十八歳でした。健康な歯を抜くのは、親や上司の死で喪に服する、成人儀礼、結婚などの理由でした。古代の歯を抜く風習は、日本だけではなく中国、台湾、などでも広くみられました。

江戸時代の歯を抜く方法とは…

江戸期の抜歯法には、次のような方法がありました。

一、銅線や三味線の糸などを歯にかけて抜く

二、棒を歯に当てて、木槌で叩いて抜く

三、釘抜き型の鉗子（カンシ）で掴んで抜く

四、尖端が扁平な鉄の細い棒でこじって抜く

銅線や三味線の糸を歯にかけて抜く方法は、江戸時代に香具師が大道で居合抜きやこまを廻して人を集めておこないました。寛永通宝などの穴開き銭を手のひらに隠し、見物人に見えないように一瞬の早業で抜いたそうです。

木の棒を歯にあてがい、木槌で叩いて抜く方法は、江戸時代の代表的な方法で、入れ歯師や歯抜き師が用いました。シーボルトが、日本から帰国後にまとめた『日本』に、この抜歯器具が紹介されています。

釘抜き型の鉗子で掴んで抜く方法は、浮世絵に描かれており、江戸時代に多く用いられていました。尖端が扁平な鉄棒で抜く方法は、虫歯で崩れた根をテコの原理でこじって抜きました。

江戸時代には、麻酔をしないで抜きましたが、麻酔効果のある薬を糸にしみこませて根の周りに押し込み、しびれてから抜く方法もありました。

十六世紀後半の信長、秀吉の時代、日本に長く滞在したイエズス会宣教師のルイス・フロイスは、「われらは、抜歯鋏、鉗子、オウムの嘴（クチバシ、抜歯鉗子のこと）などを用いて歯を抜く。日本人は、鑿（ノミ）、小槌、歯につける弓と矢、または鉄の釘抜を用いる」と日本の抜歯について記録しています。

江戸時代にはどのような人が抜歯をしたのか？

江戸時代には、上流階級を対象にした口中医、庶民を対象にした入れ歯師、歯抜き師などが抜歯に携わっていました。幕末から明治初期にかけて、横浜居留地で開業したアメリカ人歯科医を介して、近代的な西洋歯科医学が日本に伝わりました。そして、歯科材料や器具がアメリカから輸入され、西洋式の近代的な抜歯法へと変わっていったのです。